

特 241

816

團年青と社

事理務常團年青合聯本日大

述 鋪 義 澤 田



* 0052836000 *

0052836-000

特 241-816

神社と青年団

全国神職会・編

全国神職会

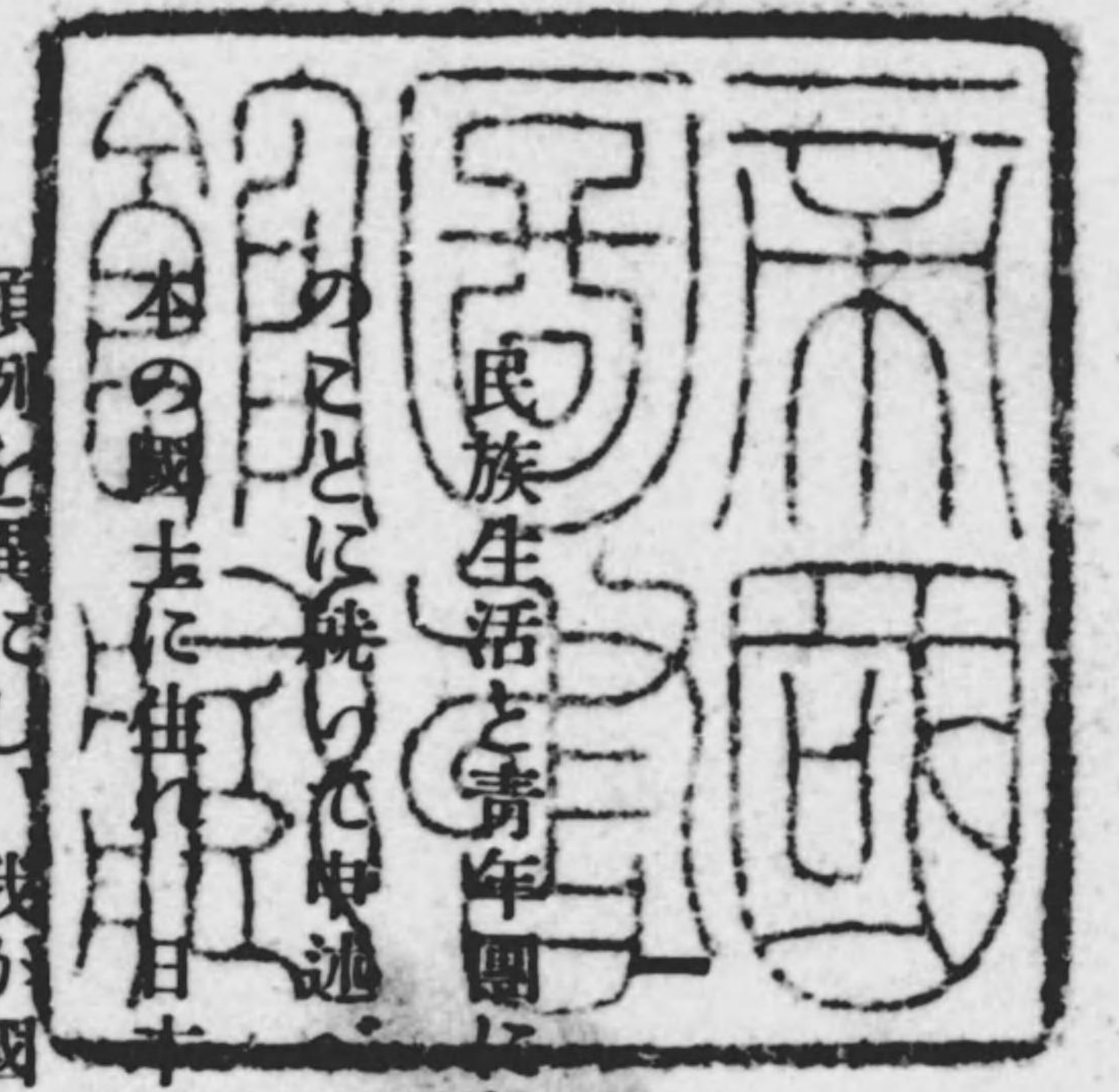
昭和9

AHP

特24/
8/6

神社と青年團

大日本聯合青年團常務理事 田澤 義鋪 述



民族生活と青年團に就いて申述べようと思ひますが、先づ私が關係してゐる青年團のことに就いて申述べたいと思ひます。我國の青年團は獨特のものであつて、全く日本の國土に生れた日本の民族生活に育てられて來たもので、全然他の諸國の青年團と類例を異にし、我が國固有の神社と、切つても切れない關係をもつて居るべき筈のものであります。現在はかなり離れて居るところもあるやうですが、元來はさうしたものであります。従つて青年團に就いて御諒解を願ひ、神職として青年團等の事業に關



係して戴くといふことが、神社側から見ても、青年團側から見ても、共に極めて相應しいことであると同時に又必要なことであると考へるのであります。さういふ氣持から私の話を申述べて見たいと思ふのであります。

現在我國に約一萬七千の青年團があり、而して二百七十萬の團員を擁して居る。これが各地に存在して聯合會を作り、郡の聯合會、縣の聯合會、大日本聯合青年團といふやうに結束致して居るのであります。てこの青年團はそれならば何時誰が作つて、今日のやうに發達し來たつたかと云ふ沿革を調べて見ますと、どうしても日本の大昔まで遡らなくてはなりませんし、又神社と切つても切れない關係に立つのであります。

そこで先づこの我國の青年團の沿革を申述べて見たいのであります。今日我々が青年團と云つて居りますものは、明治時代に青年會と稱して居つたのであります。大正四年に訓令が出ましてから、各地で青年團といふやうな言葉を多く使ふやうになつた

のであります。今でも青年會と云つて居るところがありますが、この明治の青年會は、それならば誰が作つたかと云ふと、誰も作つた人はない、徳川時代の若者團體の礎石の上に築かれたもの、それが明治の青年會であります。徳川時代には全國津々浦々到處るところに若者團體といふものが存在して居つたのであります。名稱は地方によつて多少の相違がちよい／＼あり、或る處では若衆組、或る處では若連中、或る處では若者仲間、若仲等と申して居りました。かう云つたやうな團體と稱せられるものが全國津々浦々、津輕の果てから薩摩の果まで必ず存在して居つたのであります。さうして區域は當時の村、今日て云へば略々大字位のところで、當時の村或は町内を一區域として居つたのであります。さうして年齢十五になればこの若者團體に入る。それまでは子供連中といふやうなことで、今の少年團に當るものが存在して居つたのであります。それは若者團體といふ青年團に當るものが全國津々浦々に必ず存在して居つたやうに全國的に普及されなかつたけれ共、處に依ると子供連中と稱するものもあつ

たのであります。その子供が十五歳になると一人前の若衆になる。そしてその團體に入る。昔のことだから酒の一升も買つて親が俵を連れて、若者頭のところへ行つて、「俵も十五歳になりました、宜しく願ひます」といふと、「引受けました」と云つた調子で若者團體に入るのであります。丁度青年期になりますと、なか／＼生意氣になつて親の云ふことを聞かなかつたり、或は先生と仰ぐべき人に反抗するのが有り勝ちであります。一體青年期といふものは異常な時で、一生涯の行き方が略決まる大事な時だけに、青年期といふものは所謂生意氣盛りであつて、なか／＼親の云ふことを聞かず、長上たる者の教へに服しないといふことが起るのであります。これは近頃の所謂青年心理から考へて見るといふと、如何にもさうありさうなことであるのであります。何故ならば、子供といふものは、保護されて生活するといふやうな関係もあります。せうが、權威を外に眺めてこれに服従するのが子供であります。權威といふのは、批判してよいから従ふといふのではありません。無條件に服従する、それが權威であり

ます。子供は、親の云ふことが批判して良いから従ふのではない。親がかう云つたから、先生がかう云つたからと云つて、無條件に従ふのであります。さういふのを權威といふのであります。大人は權威を内に確立して自ら判断し、自ら思考し、自ら行動して責任を負ふのであります。勿論大人と雖も先輩の教も聞き、友人の忠告も聞くけれども、それに直に従ふかどうかは判らぬ。人の云ふことを批判してそれがいゝものだから友人の忠告にても従ふのであります。即ち權威は外にはなく内にあるのであります。大人でも云ひなりになる人はそれは感心した大人ではない。自分の判断によつて行動する、そして自分の責任を負ふといふのが普通であります。大人と小供との中間が青年期で、この期に於てはどういふ現象が起るかといふと、今云つた外の權威を否定して内に權威を確立しようとする意識が生ずるのであります。さうするうちに思慮分別がついて來るのであります。ですから青年期になると親の云ふことでも時世が古いから知らんのだとさういふことを云ふ。先生にだつて中學三年位になると生意

氣盛りになつて、教室で先生の困るやうな質問をすると鬼の首を取つたやうな氣持になる。そこで親があつたの位いゝ子だつたのにどういふ譯だかあゝいふ風になつて終つたと非常に心配して周章てる。さうして小言を云ふと、よけい理窟を云つてきかない、すると一層親は周章てる。その時決して親は周章てはならぬ、例の青年期の外の權威の否定が始つたのだなとちやんと落ついて居なくてはならない。丁度大きな魚がかゝつたのと同じで、急いで上げようとするとき糸を切つて終ふ。そこをゆつくり遊がして置いて、然も決して竿を放してはならぬ。家の子は亂暴で困ると云つて竿を放さないで、即ち親の愛といふ乳房を放さないで、小さなところは構はず大きなところだけを大事に引き締めて置く、その態度は青年期にとつて必要であります。とんでもない息子が出来たと心配しなくても、年がたてば落ついて来るのであります。唯總べてを放任してはいかぬ、本當の大事な親の愛は常に注いで居らなくてはならぬのであります。所が一番困ることは、友人から進められて嫌だといふ青年が少ないことでありま

す。親に云ひつけられて仕事をやつて居つて、誰か友人が来て遊びに行かうといふとつい仕事をうつちやらかしてついて行つて終ふ。二、三年上の青年の云ふことにはまゐるつきり従つて終ふのであります。友人が背廣を着てゐるといふと、親にねだつて何んでも背廣を着たい。友達に煙草を飲むものが居ると、煙にむせながら煙草を飲みたがる。友達に酒の強い奴が居ると努力して負けざらんとする。總べて友達の持つ魅力といふものは實に大きい、そこで親の云ふことを聞かない、聞かないばかりでなく、口返事をしたがるのである。先生の云ふことにも反抗したがるといふ状態になるのであります。然らばこの様な青年をどうして教育すればよいかといふことになりました。そこで捨てる神あれば拾ふ神ありて、この友達仲間を通して青年の修養、青年の教養を圖ることが最も有効となつて来るのであります。小學校に於ては、先生が一人々々の兒童を直接に指導して下さることが一番効果があるのであります。中等學校や専門學校の生徒になると、それよりも寧ろ校風、學風といふものが、非常な影響をもつ

て來るのであります。友達仲間の風紀が悪ければ親が俺の子供だけは間違つた道へはやらないぞと頑張つても悪い友達に敗けて終ふのであります。これに反して友達の間が善ければどれ程見識がなくとも、ひとりてに良くなるのであります。そこで村の青年團が良ければ、青年の教育的見識がなくても段々良くなつて行く。村の青年團が悪ければ、親が俺の子供だけはといくら頑張つても、何時の間にか悪くなつて行くのであります。

そこで以上の様な關係を心理學的に研究した結果ではありませんが、十五歳になれば我が子連れて若者頭のところへ行つて「宜しく頼みます」といふと、すると頭が「ようごはす」と引受けまして、それから友達仲間が代表してこの教育に當るといふことになるのであります。以上の様な關係もありますが、更にもう一つの關係があります。

子供の住む世界は家庭であります。そして子供は友人と遊びますけれ共、それは出鱈目で氣に食はなければいつても歸つて終ふ、或は泣いて歸る。本當の共同生活、友達の義理といふことは考へない。出鱈目に人に馴染んでゐるだけで子供にとつての天國は家庭である。友達とつい喧嘩をして泣いて歸る、そしてお母さんの膝に抱きつくともう笑つて居る。子供の天國であります。大人の住む世界は何處であるかといふと、大人の住む世界は何んと云つても社會であります。家庭も勿論大事ではありますけれ共、大人の一生懸命に考へてゐることは、實社會に於いてどれだけの仕事が出来るか、社會がどれだけ自分を認めてゐるかといふことであります。家庭も成程青年の住む世界の一部ではありますけれ共、實際は又自治の世界で青年の住む世界は友人仲間でもあります。青年期になつてもお母ツさんの後ばかり追つかけて居つて、友人のつき合ひもしないやうでは國家の中堅たるべき立派な人間になれないのであります。此の友達仲間の社會に於いて、初めて自分といふものを認識し、自他の關係を認識し、友達つき合ひによつて人生を知るのであります。これは青年期になればどうしても

友達つき合ひをさせねばならぬのであります。家庭にばかり閉ぢ込めようとするのは、子供の本當の大成を期する所以ではないのであります。青年の中にはなか／＼人の側へ寄りつかぬ者がある。御飯を食べる時も一人食べてぼつと出て行つて家の人は一緒に食べないといふ青年もあります。さういふことは怪しからんことでありませう。人間の本當の潤ひのある尊い情操といふものは、本當の温い家庭生活の中から生れて來るのであります。賢父慈母相揃つた本當に温い教育の中から生れて來るのであります。家庭生活を全然味はないやうな青年は、本當の立派な氣品がある人間になることは出來ない。豊かな情操を持つ青年になることは出來ないと同時に友達仲間のつき合ひをしない青年は、國家社會に立つて本當に活動する人間にはなれないのであります。そこで若者團體といふものが徳川時代にあつては、この社會生活の訓練場、この町村生活の訓練場であつたのであります。そこで自分を認識し、他の關係を認識し社會を認識して段々人間として育つて行つたのであります。かういふ若者團體が徳川

時代に全國津々浦々何處にでも存在して居つたのであります。

この若者團體は多く部屋とか、宿とか稱する、今日の言葉で云ふならば會館或は集會所、さういふものをもつて居つたのであります。それは一軒の建物であることもあり、他の家族の少ない家の一部屋であることもありました。或は神社の社務所の一室或は海岸の漁村の網置小屋の一室であつたこともあつたのであります。若者はそこに寢起を共にしたのであります。處によると今日でも寢泊りをする宿が残つて居るところがあります。山口縣の萩市に近い漁村である玉江部落には今尙青年宿が四つあります。今日でも掟が儼然と守られて、この部落にて漁業に従事するものは、滿廿五歳まで必ずこの宿に入らなくてはならないといふ嚴重な掟があります。そこで先輩から漁具の修繕、漁業の方法、村民としてのいろ／＼の傳統、さういふものを教はるのであります。この宿は絶対に禁酒禁煙、一年に三日酒を飲んで祝ふ日があるが、後は廿五歳以下悉く禁酒禁煙であります。玉江部落等は今日我々が行つて見て實に面白い。そ

この神社のお祭等には、青年宿の連中が總掛りて海上遙か三里の沖合から四つの宿がそれ／＼小舟を仕立て、神社の前の濱に向つて競争をしてやつて来る。その時は白木綿で腹巻をしてありつたけ漕ぐのでありますが、三里の間一生懸命漕いで居ると、皮膚がすれて白木綿に血が吹き出して赤くにじんで終ふ。誠に勇壯なものであります。それを一番の樂として居る。又この宿の親爺さんが居つて、親爺さんといふのは先輩で指導者として居る人で、今年の親爺さんは誰々と區長から命ぜられる。それがつまり宿頭であります。親爺さんといふ指導者は親達の社會から任命されるわけでありませう。小學校長を今の青年團の指導者として選ぶと云つたやうな調子であります。尙こゝでは禁酒禁煙をよくやつたもので本當に感心するやうな人物が宿頭になるのであります。どうしてかういふやうにうまく行くかと考へて見ると、こゝの部落では大船頭といふものが、部落全體の主權者であります。今年度の漁場を選定するといふことも、取つた魚を何處へ揚げるといふことも皆この大船頭が専斷して決めて文句を言は

ぬ。又争ひごとがあれば裁判をする。かういふことが二百年前から選舉て行はれて居る。さうして年期は二箇年ですが、選舉は毎年やる、どういふことであるかといふと初めの一年は見習ひ、後の一年が本當の大船頭、さういふやうになつて居ります。さういふやうに全部の漁師が大船頭の選舉を行つて居るのであります。でありますから一度男子として生れた以上どうかして大船頭になつて見たいといふアンビッションが男といふ男には皆ある。そこで大船頭になるのには品行をよくしなくてはならぬといふので、この部落では短所は發揮されなくて、長所のみが發揮される様になつて居ります。

この様な例は愛媛縣にも、三重縣にも残つて居る。殊に海岸が多い。さういふやうに、部屋とか、宿と稱して共同生活をやつてゐる。結束も非常に固い。悪いことをすれば制裁を加へられる。この制裁の方法にも非常に面白いのがあります。或る地方では神社のお祭の前の晩に一年中の悪いことをした者を訓戒する風習があります。そし

て明日お祭を迎へる時一切懺悔をする、穢れをとつてお祭を迎へる。皆んな悪いことをしたものは、先輩から訓戒して貰うて「これからは氣をつけます」とすつかり新しくなつて祭に奉仕するといふ習慣であります。さうかと思へば鹿兒島縣揖宿郡の東の海岸地方に行くと、月夜の晩海岸に出て、諭す方も砂原の上に静座して、諭される方も砂の土に静座して、月光静かに照すところて不心得を先輩が後輩に對して諭す方法が長い間行はれて居ります。所がさういふ忠告、教訓のやうなしきたりがあつても手に負へないと村八分にします。若者連中から八分になる、即ち今日の言葉で云へば除名されるのであります。除名することを八分にするといふのは、我々の社會生活の全部が十で、八分といふのは十分ノ八を除名するといふこととてあります。そして十分ノ二だけ後に残す。それは何んの爲かといふと、その家に不幸があつた時、例へば誰か亡くなつた場合には、青年團は除名して居るが、墓を掘つてやらなくてはならぬし、棺も昇いでやらなくてはならぬから、その時は後の二待遇だけで附合つてやるといふの

てあります。不幸の起る場合があるから二分だけ残して附合つてやるが後は附合はぬといふことを八分にするといふのであります。今では小作爭議等で十分にする、死人があつても手傳つてやらぬといふ風に十分にするところがありますすけれ共、昔は制裁を下しても二分のゆとりを置いたのであります。これなどはつくり噺のやうてありますすけれ共、年をとつた人に聞くと大抵さう云うて居ります。

それでは若者團體はどういふ仕事を致して居るかといふと、こゝが一番問題であります。徳川時代の若者團體の第一の任務は神社奉仕であります。掃除からお祭の時の飾りつけから或はお祭の時の神事、行事、餘興といふものに參加關係することとてあります。それに次いで神社の奉仕にも關係して居りますが、村の社交娛樂に參加し、村の年中行事即ち正月のどんく焼とか、盆踊とか、五節句、七夕祭、豊年祝、虫追ひ等に関係して居る。これが第二の青年團の任務であります。第三にどういふ仕事をするかといふと、町村警備であります。この村に火事が出れば消防の役目をする。泥棒

が來れば防ぐといふ町村警備の任に當つて居るのであります。第四に修養教育であります。今日のやうな修養教育ではありませんが、兎に角村民としての傳統を引き繼いで行くために、注連のつけ方、山車の昇ぎ方からいろ／＼の村民としての修養をやつて行く、これが青年團の力であつたのであります。斯の如き青年團が全國津々浦々到處に存在して居つたのであります。尙武士階級には別に例外として鹿兒島に青年團がありました。外に今日の青年團と見るべきものはなかつたのであります。これは庶民階級の話であります。武士階級は藩の學校で教育を受けるのでありますが、それは家庭教育ですから青年團とは云はなかつたのであります。鹿兒島は頼山陽が武士階級で青年團をやつて居つたのであります。それは今日から見ても鹿兒島の青年團は學ぶべき點は非常に多いけれ共、我國青年團の本流ではなかつたのであります。

二

さて斯の如き若者團體が徳川時代に存在して居つたのであります。その若者團體は

誰が作つたか、徳川將軍が命じて作つたのか、各藩の學者が相談して作つたのか、或は將軍大名が發起して作つたのか、否、將軍、大名、學者等が相談して作つたのではない。誰も作つたものがなくして全國津々浦々津輕の端から鹿兒島の端まである。さういふ事實は何を示して居るかといふと、その淵源が古いといふことを示して居るのであります。既に鎌倉時代に存在して居つたのであります。その鎌倉以前に遡ることは想像するより外ないのであります。我々研究者の想像するところによれば、この青年團といふものは、我が大和民族の原始時代以來の風俗習慣で、大和民族と共に古い起源をもつて居るものと考へるのであります。これを直接證明することは歴史として土俗に關係して來るのであります。土俗學といふものはまだ充分に發達してゐない。そこでさういふ昔の状態が判らぬのであります。従つて證據を擧げることが出來ないが、兎に角徳川時代に全國津々浦々何處へ行つても存在して居つたといふことは、その淵源が遠いといふことを我々は知ることが出来るのであります。而してこれ

を傍ら證明して呉れるものがあります。それは何であるかといふと、臺灣の生蕃に徳川時代の若者團體そのまゝのものが現存して居ることとあります。生蕃部落の中心に公廨と稱する部落の集會所があります。その公廨へ何か事ある時には、蕃人が集つて收穫祭の相談等に使用して居ります。夜になると青年達が其處へ來て寢泊りをするのであります。この公廨は青年の共同生活の場所となるのであります。さうしてその青年達には矢張り團長に當る指導者があり、先輩がその指導の任に當つて居るのであります。これは一面から見れば青年の共同生活所であり、一面から見れば青年の學校でもあり、軍隊の衛營であると云つてもよいのであります。私は臺灣へ行つてかういふ生蕃の公廨で使ふ傳令の腰に差す鈴を貰つて來たのであります。鐵の片を錐て穴をあけて鐵の棒を一本下げて糸で括つて腰に下げて居りますから、一生懸命歩いてゐるものはがらくと音がするが、ノソリノソリと歩いてゐるとガラリノソリと音がするから元氣のよいのと悪いのが指導者が家にもちやんと判るのであります、さう云つ

たやうな仕組みになつて居ります。敵が襲つたといふと勿論第一線に立つて働く、しりごみすることを非常に卑しむのであります。さうしたやうなことで青年生活を樂しんで居るのであります。以上の事柄を考へて見ますといふと、太平洋上に棲息して居る民族、その民族の風俗習慣が原始時代から相當に擴がつて居つたのではないかと思ふのであります、南洋の土人全部ではないが、かういふ風俗習慣があるといふことを考へて見ますと、へんなことを云ふやうですが、研究だから申し上げますが、原始時代の生活は、建物と云つても粗末なもので、部屋も穀物の米倉のやうなもので二部屋はない、従つて同じ部屋に親達夫婦が寢てゐる。そこで青年期になつたものは親達の部屋に寢起きをしないのは當然であります。そこで何處かへ住まつて共同生活をするといふ風俗習慣が原始時代から自然に生れて來たのであらうと思はれるのであります。そこで日本の青年團もさういふ古い淵源をもつて居るといふことが考へられるのであります。

こゝて私達は一つの疑問に逢着するのであります。臺灣の生蕃のやうに、或は南洋の土人のやうに、自分で文化を作らず他の文化にも浴しない民族が原始時代同様にこの原始時代の風俗習慣をそのまま現して居ることは、當然過ぎる程當然であります。ところで我が日本の如く自ら文化を作り、又他の文化にも浴して居り、政治上、社會上その他萬般の制度の上に幾變遷を経て居りながら、尙原始時代の風俗習慣をそのまま持ち傳へて來たのは一寸不思議ではないか。さう云つたやうな風俗習慣が現在日本だけあるといふのはどういふ譯なんだらうといふやうなそこに一つの大きな疑問が湧いて來るのであります。これは當然の疑問と考へられるのであります。この疑問に答へる主たる問題が神社であります。神社が存在するが故に我國の青年團は原始時代よりなくならずに維持され發達して來たのであります。私が申述べるまでもなく大和民族の生活するところは何處かといふと神社であります。大和民族といふものは神社なしでは生活が出来ない民族であります。而して我國の地方生活、村落といふものが

どうして出來たかといふことを考へる時にこの神社を無視して考へることが出来ないのであります。神社を中心として部落が拓け、そこに所謂郷土生活が現れて來るのであります。而して日本の神社はキリスト教や佛教等の宗教の神、又は佛と、大分性質が違つてゐるのであります。所謂全智全能の神であるとか、或は久遠の本佛であるとかと云つた様に、頭て考へた超人的の絶対神の宗教の神或は佛などとは大分違ふのであります。云ふまでもなく我が神社に奉齋せる神は現に肉身をもつてこの地上に居られた我々の祖先で、徳の高い尊い方を仰いて神として祀つて居るのであります。従つて現に肉身をもつて、この地上に生活してゐてになつた、さういふ神だから神と人との間の關係が非常に親しく近いのであります。ところが寺や教會では悪いことをすれば罪業に陥される。恐しいからそこで前途の短い年寄りが行つて後生を祈るのが普通であります。然し神社はさういふ恐しい神が極樂にある地獄にあるといふよりも現に我々の祖先であり血肉が續いて居る神靈が奉齋されてゐるのであります。そこで

神社には若い者が親しみのあまり神主にせられるのであります。無論伊勢神宮や明治神宮にお参りした氣持は別てありますが、鎮守の杜に對する村の人々の心持は非常に深い敬虔の念を持つと同時に一面温い親しみを持つのであります。お爺さんの廻りに孫共が團欒して居るといふ氣持が多分に藏されて居るのであります。そこで親しみがあつた上に尙親しみを増さうといふので御輿に神を奉じてワツシヨ〜と氏子中臈ぎ廻るといふこともやり出すのであります。故に神社は、村落生活の全面的の中心であつて、神社を中心としてこの日本の村落生活、郷土生活といふものは現れて來たのであります。祈年祭、新嘗祭は云ふまでもありませんが、徳川時代から明治の中頃までの民俗を考へて見ますと、神社のお祭位氏子にとつての楽しみはなかつたのであります。今日ではいろ〜の娛樂機關等もありますが、娛樂機關のない昔に於ては、神社のお祭、鎮守のお祭は村落生活として最も楽しいものであつたのであります。祭とは神を慰めることであるが、人も又楽しむ、神人共に楽しむ、これが即神社のお祭であ

ります。一面には嚴肅、敬虔、一面には和樂、さう云つたやうな氣分て神を慰め、人も楽しむといふのが鎮守の森のお祭であります。そこでこのお祭の時こそ出来るだけの力を動員して、さうして面白い、いろ〜の楽しむやうな行事を行ふ。さういふ場合に若い元氣のある、さうして何かしないで居られない好奇心に燃えてゐる青年達が最も活躍するといふことはこれは當然であります。そこで社會制度が變遷しようとも、政治組織が氏族政治から民權政治となり聽て武家政治となるといふ風にいろ〜と變遷しても、村落生活は神社を中心として居るのであります。斯くの如く神社で毎年お祭が行はれるといふことは、大昔ながらの青年團がなくなる隙がなかつたといふことを物語るものであります。祭事に青年團が動員されてゐる間は、社會の制度が、政治の組織が如何に變遷しようとも神社を中心とした村落生活が存在する限りは大昔ながらの若者團體がなくなる筈はなかつたのであります。徳川幕府まで立派に保存せられたといふことは、全く神社のお蔭であると申して宜しいのであります。神社と青

年團は斯くの如く切つても切れない關係にあるのであります。これが主たる原因であります。日本の村落といふものが密集地であるといふことが又青年團といふものが他になくて日本にあるといふ理由の一つであると思ふのであります。

一體人類經濟生活の過程を考へて見ますと云ふと、第一期は狩獵時代、その次の第二期は漁業牧畜時代であつて、狩獵は一番始めて次に濱に出て漁業をするが、暴風等が續いてそれが出來ない時に備へるため、前もつてとつて置いて生捕りにして飼つて置いてさうして何時でも必要の時に食へるといふ風に人間の考へ方が進歩して、牧畜時代となり、更に進んで農業時代となるのであります。農業といふのは餘程人智が進んだ時代で、春種を蒔いて秋稔るのを待つて刈り取るといふ様に、半歳の間先の計畫が出來るといふのは少し人類の生活が進まないと出來ないこととあります。お腹が空いたからといつて食へるといふ原始人の生活、それから生捕りにして置いて必要の時

食へるといふ生活は大した差違がありませんが、半歳の後まで計畫を立てるといふことになるとなるまでには、人類の生活がかなり進歩しなければならぬのであります。農業時代の次が所謂部落の商工業時代であり、それが更に現代の所謂資本主義の大産業といふ風に經濟生活が變化して來たのであります。これが大體世界の人類の經濟生活の發達史の階程であります。ところが我日本は他の大陸の國と趣を異にして、牧畜時代がなしに、狩獵時代から眞直ぐに農業時代に入つて來たのであります。即ち世界人類の發達史の例外として牧畜時代を抜いて眞直ぐに狩獵時代から農業時代に入つたのであります。それは地理的關係で島國で山が多く、河が亂流し、雨量が多いので平原といふところが少ない。今日大和平野と申します共、所謂大和民族の本當の原始時代の平原も恐らく河が盛んに亂流して居つたらうし、あちこちに沼があつたらうし、立派な平原になつて居つたかどうかこれは随分疑問であります。さう云つたやうな地形の關係で牧畜に適さない。従つて狩獵時代から眞直ぐに農業時代に入つて來た

わけて、日本人は家畜を飼育することが實に下手であります。

かういふ點から考へると牧畜時代を経験した民族は、轉々として住居が變り、一つの村といふ關係が、日本のやうに細かでない。牧畜するものは綠草を求めて轉々と移轉して行くのだから村落といふやうなもの程緊密な細かな情操を伴はない。こちらに一軒あちらに二軒といふ風にぼつん／＼としか家がない。村の中心地に五、六軒、郵便局と馬の蹄鐵屋と雜貨店と宿屋と云つたやうなものがあつてあとはあちこちに飛び放れて居る。さういふところに獨立自尊と云つたやうな長所が發達する。日本のやうなこの村落では山が高くそして河が亂流してゐるところでは、北に山を負うて、南に陽を受けて居る住居に相應しいところに大抵決まる。さういふところに家が出来て、部落が密集して来る。そこに近所つき合ひといふ美風が現れて来る。それは全く生活環境から来る美風であります。さういふやうなところでありますから村落生活といふものが非常に濃密になるのであります。そこに青年團といふ集團が、自から發達して

來るのであります。即ち神社があるといふことと、日本が牧畜時代を経過しないで、狩獵時代から農業時代に入つて行つたといふこの二つの事柄が、日本の青年團が今日を來した根本の原因であると思ひます。

三

そこでもう少し神社と青年團の關係を申し上げますと、滋賀縣の犬上郡に在る、某神社に十年前からしめくらべといふ神事が残つて居るのであります。今日の言葉で云へば蔬菜品評會であります。各氏子が作つた穀物や蔬菜を神社の社殿に並べて神職とやりとりをするのであります。その神事が残つて居るのであります。やりとりをすることを千年前の大和言葉をもつて今日まで維持して居るのであります。(三上博士の論文に書いてあるのであります。)この神社のしめくらべの神事に保存されて居る色々なものを見ても千年前から村の青年達が青年として收穫品評會をやつて居つたことが判るのであります。即ち青年と産業と神社といふことの本當の合體した事實をこゝに觀

ることが出来るのであります。そのやうに青年達は神社の年中行事に澤山關係して居ります。それが纏つて體育ともなれば前述の玉江部落の血染の腹巻で競争するといふことも神社と青年と體育といふことの合體した點と見ることが出来るのであります。而してその一番良い例としては昔のことを云へば紀州熊野の官幣大社熊野速玉神社に御船祭といふ神事があります。足利義滿が献上した朱塗の船が今國寶になつて居りますが、金碧燦爛たるその船に御輿を奉じて熊野川の清流に浮べ上流に漕いで行くと、一つの島が水の上に面白い姿を寫してゐる。その島に御座船を繋いで附近の村々の青年達が、今のボートレースのやうに昔の船をもつて島を廻つて競争をする。その競争が済んでから岸に上り神輿を昇いて神社に還るといふ風習が足利時代から行はれて居るのであります。さういふことを考へると神社と青年と體育と云つたやうなことが、こゝに考へられるのであつて、明治神宮の體育會が我國で始めて行はれたものではないのであります。又鎌倉の鶴岡八幡宮の流鏑馬はそれは武士階級のことではありますが、

それに似たものは到る處にあつたのであります。斯く考へて見ますと神社と青年と産業と體育と娛樂と凡ゆる方面に青年生活と神社といふものが結びついて居るのであります。全く今日の青年團の生みの親、といふことは云ひ過ぎかも知れませんが、育ての親であるのは神社であります。斯様に三千年の長い間青年團を育て、來た神社が、近頃外の人が育て、呉れるだらうから知らぬと仰つしやるとしたら、随分へんてこな現象ではないかと私は思ふのであります。何處迄も今後と雖も神社はこの青年團を育て、下さなければならぬと思ふのであります。青年は又何處迄も神社奉仕の誠を盡さなければならぬとかういふ風に私共は思ふのであります。さういふ見置から考へますと神社の境内には、どうしても神社の力によつて出來た青年俱樂部、青年集會所があつて欲しいのであります。それから又一切の郷土資料、郷土の事蹟、風俗習慣等郷土を研究した資料、大きく云へば郷土博物館、陳列所といふものが神社の社務所の脇に必ずあつて欲しい。又青年俱樂部も社務所の脇に必ずあつて欲しいのであります。

そこに青年達は集つて本を讀む、或はそこで繩を縛ふ、蓆を織るといふやうな、さういふものが神社にあつて、そして神社中心に青年が集つて來るといふことが是非必要だと考へるのであります。これが大體徳川時代までの青年團の昔からの状態であります。所が明治以後の青年團は大分様子が違つて來たのであります。

四

斯の如く青年團が徳川時代に至るまで存在して居つたのであります。明治維新になつて、明治維新といふのは御承知の通り總べてのことが新になつたこととあります。さうして識者の眼は新に／＼と進んで行つたのであります。勿論國本に關すること、皇室に關すること、神社に關すること等は忘れなかつたのであります。特に神社に關しては廢佛棄釋と云つたやうに古神道が復活されたのであります。それ以外の古いことは、舊來の陋習である、文明開化は船に乗つて外から來る舶來であるといふやうな思想が一般を風靡して、古いところに目をつける奴は因循姑息な奴でチヨン鬚頭

であるとして輕蔑したのであります。文明開化の動向は洋服紳士ばかりを明治の新機運を拓いて來る戰士の如く考へたのであります。さういふ時代でありましたから、昔から村々に存在して居る若者團體と云つたものゝ中に本當に尊い意義があるといふことを考へて呉れる識者はなかつたのであります。明治になつてから指導者がなくなつて終つた。そこで時勢と共に進むことが出來なかつた。時勢は明治になつてから非常な勢ひで進んで、青年團は指導者を失つたから時勢と共に進まず遂に明治になつて青年團は徳川時代よりも墮落し混亂したのであります。従つて前に述べた青年團の四つの仕事である神社奉仕はいゝ加減になつて終つたのであります。かういふことを申し上げるのは悪いかも知れませんが、最近に於ては神社の總ての事を氏子總代にやつて貰ふ様になつたので若衆はうるさくて困るといふやうな理由で若い衆を認めぬやうになつたのであります。即ち尊敬しないで次第に邪魔物扱ひにして終つたのであります。今日神社では僅か御輿を昇ぐといふことのみが若衆に残つて居つて、それ以外のこと

は殆んど關係がなくなつたのであります。その他神社の祭典や年中行事に伴うての社交娛樂方面を考へて見ると、これ等は歐化思想の影響から裸足になつたり、裸體になつたり、ヨーロッパ人の嫌がることはやつてはいけない、といふ警察の干渉で止められて終つたのであります。何んでもかんでも舊來の陋習だと云つて止めて終つたのであります。勿論ヨーロッパ人が嫌ふことは日本人として考へても解る。ひどい猥褻なこともいろ／＼あつたてせうが、さういふ風なのは自主的に勿論止めなくてはならぬが、唯裸足になるのが或は裸體になるのが悪いといふだけでもつて、郷土味といふものを、十二分に味ひ得る藝術的香氣、尊い文化的所産のあるものまで玉石共に止めて終つたのは惜しい事でありませう。もう一つ村の賑ひが破壊されたのは、舊曆が新曆に變つたためであります。それも統一されて居ればよいけれ共、あちらは新曆、こちらは舊曆といふ風になつて、年中行事に統制がなくなつたのであります。正月が二度來るやうになり、お盆等も晦日に來る様になつた。盆が來ても闇で踊り明かさうといふ

氣持にはなれない。又桃の節句に桃が咲かない。さう云つたやうな状態で年中行事を中心とした村落生活の味ひ、賑ひといふやうなことがすつかり影をかくして終つたのであります。その次に町村警備であります。近頃になつて飛行機が來るから青年團が出るとか、防空演習で青年團が第一線に立つとかいふ位で、その他のことは警察の完備につれてだん／＼用がなくなり、又一方警察の完備につれて若い者が出るとうるさくて仕様がなからあちらへ行けと追ひやられて、町村警備には青年團が關係しない様になつたのであります。次は修養教育であります。これは青年團が指導者に見離され時代精神を把握することが出来なかつたため遂に青年の修養教育に於いては効果を擧げることが出来なかつたのであります。そこでよい行をせず悪いことばかりをする様になり、夜遊をして男女の風紀を亂し、そして酒を飲み博奕を打ち、隣村の青年團と喧嘩をする、村の有力者のうちへねだつて酒肴を出させるといふことばかりやつて、徳川時代の若者團體が明治初年になつて、寧ろ腐敗墮落して來たのであります。徳川時

代には男女の風紀も割合ひに良かった。即ち當時の社會生活から考へれば、道德觀念を基礎として、社會生活に伴うて立派な施設の機能を現して居つたのであります。明治になればそれすらも出来ないで斯様な滅茶苦茶な状況になつて終つたのであります。

さういふ状況であつたのでこれではならぬと考へた人達が出来たのであります。どういふ人達かといふと、主として學校の先生及村の篤志家であります。そのうちの代表的な人は、廣島縣沼隈郡千歳村の山本瀧之助先生であります。山本先生は十七、八歳の頃から役場の書記をしたり、或は學校の教員をして青年の様子を見て居つたのであります。が、どつしてもこれではいかぬ。明治政府が小學校教育に熱心で小學校を建てるけれ共、さて小學校を卒業し、新時代の教育を受けた青年達がどうするかといふと、皆んなだらしがなく男女の間で風紀を亂す等よからぬことばかりする。折角小學校で教育したのが何にもならぬ。これでは若者團體を何んとかしなれば小學校教育そのものが効果を發揮することは出来ないといふことを考へて、そして若者團體の改

善に手をつけようと考へたのであります。そしてさういふ山本先生と同じ考へをもつた識者がぼつ／＼方々に出て來たのであります。そのうちで何んとか改善しようといふ行き方に二通りあつたのであります。一つは小學校の卒業生だけで同窓會を作つて、だらしない連中を敵にし勝つて終うとしたのであります。それを随分やつたけれ共、小學校卒業生だけで同窓會を作つて戦を挑んで勝を占めるといふことは弊害ばかりは甚しくても簡單に出来るものではなかつた。そこでもう一つの方法は小學校を卒業した者を誰彼の別なく若者の仲間へ入れて行つて、風紀をよくし、本を讀ませ、眞劍に修養に努力させようと考へたのであります。この法がどの位難しいか判らぬのであります。が、遂に成功してそれから今日の青年團が出来上つたのであります。山本先生はそれから一生懸命に青年團の指導に當られ、日清戦争が起つた時にこの千歳村の青年團が慰問品を作つて軍隊の恤兵部へ献納したのであります。これが明治の青年團が修養に醒めて國家に奉仕した最初のことであるのであります。

それ以來各地に第二第三の山本先生のやうな人が出て来て青年の指導に努力し、以て國家に奉仕しようといふ態度を盛んに執つて來たのであります。明治廿九年にこの山本先生が「田舎青年」といふ本を書いて居ります。さうしてその中に「朝野の識者が國家の將來は青年の双肩にありといふことを文章に書いたり或は演説で云つたりして居るが、本當にその文章を読み、演説を聽いて見ると、この朝野の識者の云ふところの青年といふのは、それは地方に於いて、田園に耕し、濱に漁つてゐる田舎青年を云ふのではなく、笈を負うて東都に遊學し、都大路を濶歩する青年を稱して云うて居るのである。果して國家の將來は遊學書生だけで背負つて立てるのであるか、田園に耕し濱に漁つてゐる青年を無視していゝのか」といふ熱辯をもつて朝野の識者に深く訴へて居るのであります。さうして一方には田舎の青年達に、「朝野の識者から無視されてゐる、だが考へて見れば無視されても仕方がない、毎日酒を飲んだり、博奕を打つたりして遊んでゐるからだ。そんなことでどうして本當に國家の將來を背負つて立

てるのか」と聲涙共に下る調子で、朝野の識者と田舎青年に向つて小冊子を書いて居るのであります。今日見ても立派な主張であると思ふのであります。

さういふやうなことから段々青年團が復活して來たのであります。さうして日露戦争になりますといふと、國家的に新時代の精神に醒めた青年團が各地に盛んに興つて來たのであります。丁度日露戦争の時内務大臣芳川顯正伯が明治天皇から戦時中の地方の状況を見て參れといふ御命令を受けて、二府十五縣を視察し、廣島の旅宿に到つた時、山本瀧之助先生が一教員の身で内相の旅宿を訪れて徹宵この青年團の活躍を説いたのであります。それ以來内務大臣は非常に地方の青年團に共鳴して、各地を廻る時は青年團の活動状況を詳細に調べて參つて明治天皇に御復命申上げたのであります。その内容が「時局と内相の巡視」といふ小冊子となつて今日まで残つてゐるのであります。それを讀んで見ると各地の青年團は何をやつて居るかといふことを内務大臣が明治天皇に申上げたことが詳細に出て居るのであります。兎に角日露戦争に刺戟

されて各地に盛んに青年團が興つて、出征軍人に代つていろ／＼世話をしてやる。苗代や植付まで何にかにもしてやる。そして何んにも心配なことはないから俺達の分まで國家のために盡して呉れと村の青年團が出征軍人を勵して銃後の憂ひなからしめるように努力したのであります。さういふ風に一度人間が醒めると、凡ゆる方面に醒めて來るのであります。その外夜學をやるとか、植林をする、或は道しるべを立てる、掲示板をつくるとか、或はバリカンを買つて髪を刈り、その費用を貯金するとか、物を作つて共同販賣をやるとか、今日程普及發達しては居りませんでした、今日先づやつて居るやうなことは大抵やつて居りました。さういふ風に眞剣に青年團がやりだして來たのであります。それでドイツの武官が當時の廣島縣地方の青年團を觀て、本國政府に日本の日露戰爭當時のことを詳細に報告したのであります。それを見てドイツのフォンデルゴールツといふ、日本の乃木大將のやうな清廉潔白な立派な元帥てありますが、その人が復命書を読んで、それを眞似て作つたのがヤングドイツマンと

いふもので、政府が補助して各地に徹底的に力を効し、ヨーロッパ戰爭の當時非常な成績を擧げて居つたのであります。唯軍國的に軍事教育のみに偏したためにドイツの軍閥の没落と共に衰へて終つたのでありますが、さういふ風で日露戰爭當時の日本の青年團の活躍は實に素晴らしいものであつたのであります。

五

一體日本の青年團といふものは國産品であります。大抵の制度は輸入品であるのに對して青年團のみは國産品で而もドイツが眞似て居るのであります。又イギリスのポ―イスカウトまでこれを眞似て終つた。あれは鹿兒島の青年團を研究してさうしてこれによつて改良を加へたものであります。世界の一番有名な二つの青年團が皆日本を眞似たものであります。全く青年團運動によつて世界の第一線を進み來つた。そして世界を習はしめた歴史を持つて居るのであります。歴史を誇るものは歴史の誇りを飽迄維持しなければならぬ責任がある。青年團關係者はこの責任の覺悟を自覺しなければ

ばならないと思ふのであります。日露戦争の青年團の活躍はイギリス、ドイツ兩國をも真似させたが、それから始めて日本政府が青年團といふものを指導するようになったのであります。それまで政府の方針として指導し援助したといふことはなかつたのであります。日露戦争後の政府が何んかしてはならぬと云うて、明治卅八年九月に始めて地方局長吉原三郎氏の名によつて戦争が済んだからと云つて止めては困る。戦争が済んでも平和の團體として何處までも持續して行くようにといふ通牒を地方長官に出した。これが日本政府が明文をもつて青年團に觸れた始めてあります。次に文部省普通學務局長澤柳政太郎氏が成人教育をやらうとして昔から存在した若者團體を調査してその基礎の上に立つてやらなくてはならぬといふことを通牒して居るのであります。それ以來は内務文部兩省これを援助して又民間の識者も自覺して段々今日のやうな状況になつて來たのであります。これが大體日本の青年團の沿革であります。これにて日本の青年團が、日本の民族生活の深き根柢をもつて育つて來たといふことを

御承知下さつたであらうと思ふのであります。これこそは、日本の國土が傳へ日本の民族が作り出したものであります。その民族と國土の合體するところそこに郷土が開拓される。青年團はその郷土生活の所産であります。こゝが非常に大事な問題であります。そこで我國の青年團は、本來は郷土即ち村の青年團が固有の存在でありまして、それから大日本聯合青年團が出來て、その下に各府縣に支部があり、町村に分團があるのであります。町村の青年團も同じ性質をもつて、似たやうな仕事をして居るのであるから箇々ではいけないからといふので府縣の聯合青年團を作り、遂に大日本聯合青年團を作つて居るのであります。それで本來固有の存在は郷土にあるのでありますから、全國劃一的の青年團であつてはならないのであります。地方々々の實情に即する青年團でなくてはならぬと思ふのであります。海岸地方もありませう。山の中の地方もありませう。平坦地の農村も、都會もありませう。それ〴〵實情に應じた青年團の行き方でなくてはならないのであります。日本は統一といふことが非常に好き

てあります。これは決して間違ひではない。國本に關することは絶対に統一しなくてはならない。けれ共それ以外のことはこれは各々頭を働かせて始終努力せしめるのでなければ、中央から命令して行はせるといふ行き方では本當の偉大なる國民を作ることは出来ないであります。こゝが一番呼吸の難しいところであります。今の町村自治でもあまり統一が過ぎる。何處へ行つても同じやうなことをして居る。もつと村の教育に觸れなくてはならないと思ひます。國本に關すること例へば神社奉仕といふやうなことはこの限りに非ずして統一されなくてはなりません。その外いろくゝの生活に關する問題はその村の實情に應じた行き方であれば、何處も彼處も同じやうなものになつて終ふ。それでは偉大な國民は出来ないのとあります。今上陛下が朝見の儀の御詔勅に仰せられて居る「摸擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ」と、いふ自主創造の國民を作らなければならぬと思ふのであります。て、本來は自主創造の國民であつたのであります。即ち萬國に誇る深遠なる國體を作り、神社制度を作つた。何處までも自主創造

であつた。歴史の示す如く二千年前既に支那大陸殊に黄河の沿岸を中心とする文化の華が高調せられ、支那と交通する文化が進んで居つたのであります。宗教哲學といふ方面でも随分多かつた。さうして近代になつてヨーロッパの物質文化に就いても確かに學ぶべきものを多く持つて居つたのであります。かういふやうな調子で本來から固有には自主創造の國民であつたけれ共、如何せん永いこの歴史が始つて嘗つてなかつた模倣追隨といふ國民性の弱點をつくり上げて終つたのであります。思想問題ではロシアにかぶれ、街頭の風俗はアメリカかぶれといふ情ない状態になつて終つたのであります。そこでどうかしてこれを打ち破つて自主創造の日本文化を作らなくてはならぬといふ聲が澎湃として起つたのであります。ところが近頃或る一部の人は對外的のものを一切排除しなければならぬといふものがありますが、さういふ偏狹固陋な態度では本當の日本文化は出来ないであります。どし／＼いゝものはヨーロッパの物でも支那の物でも廣く採り容れなくては、世界に智識を求めて皇基を振起するといふ明

治天皇の御聖旨に悖るものであります。矢張り外國の文化でもいゝものは採らなくてはならないと思ひます。いゝか悪いか標準をつけて、それが日本的のもので自分の國に倣めて良ければ何處のものでも構はない採ればよい。それを頭から良きも悪しきも構はず、それアメリカにかういふものが流行しだしたから、ロシヤではかうだ、何處でかうだといつて何もかも採り容れるやうでは困りますが、自分の頭で考へて見て、何處々々がよいから參考になるから採らうといふ採り方でなければ偉大な日本民族とはなれないと思ひます。唯かういふ風な攘夷の思想に還らうといふやうな思想は現代の大日本國民として絶対に採るべき道ではないのであります。本當に自主創造をやらなくてはならないのであります。自主創造をやるには國民自からの頭から織り出してやらなくてはならないのであります。さうした文化を作り出す人間が集つて、自づから特色が出来るのであつて、自主創造の文化を主張する人が、彼等に考へせしめることをしないで、唯勢ひをもつて教へ、その勢ひに追隨せしめるだけで眞の日本文化が

出来ようと思ふのはそれは大間違ひでありまして、自から考へ、自から研究し、自から工夫して行く頭を作つて行かねば駄目であります。自から日本の國土に於いて、日本の社會に於いて自分の頭から考へて出来た日本的のもの、それが日本の自主創造の文化であるのであります。

それで自分のことを云つてへんでありますが、私は若い二十六の時或る郡長をして居つたのであります。さうして知事さんが地方長官會議で東京へ來て、方針を授けられて歸つて直ぐ郡市長會議を召集せられた。さうすると或る老郡長が、御方針は委細諒承致しましたが、てはその方針を執行するために方法手段がいろ／＼あるだらうと思ひます。その方法手段が郡によつてまち／＼になつて居りますから規則を一つ作つて頂きたいと思ひます。とかういふことを私共の先輩の老郡長が云つたので、私は反對したのであります。御免を蒙りたい。郡長である我々こそ郡の事情に通じて居る筈である。郡の事情がまち／＼になつてゐる所へ一つの規則を持つて行くから何事も出

來なくなるのである。まち／＼になつて居ればそれに應じてやるべきではないか、それが統一されるといふ風になるからいけないのである。とかう云つたのであります。するとその老郡長は休憩中私のところへやつて来て肩を叩いて、君は若いから理窟を云つて困る。君のやうな方針を執つてゐたら郡長が責任を負はなければならなくなる。縣廳の示しの通りにやつて居れば出来ようが出来まいが我々の知つたことではない。君の云ふやうなことをしてゐたらやれたらよいが、その通りにやれなかつたら、我々が責任を負はなくてはならぬ。それでは郡長の首は幾等あつても足らぬ、といふことを云つたのであります。實に情けないと思ふのであります。それで私は町村長の諸君を集めて郡役所の方針を示すと、郡の方では規定がないとやり難い、規定を作つて貰ひたいと云ふ。いやそれはあなた方が村の事情には詳しいのだから御相談してそれに應じていゝか悪いか、やつて貰へば規定を作ることではない。といふのであります。ところがどうも規定で縛られぬといかぬらしいのであります。役所は規則々々

て縛られつけられてゐるものだから、小さいことまで縛られて、人間力で處置するといふことをしない。總べて法律規則の綱の目から口を出して呼吸をしてゐる役人といふものは、人間力で大難に打勝つて仕事をするといふやうな發洩とした行方が出来ないのであります。これでは自主創造の文化は出来ませぬ。自分達でやるといふことをしないから随つて國家にあまり要求し過ぎる。手本だけは政府でやつて貰つて後は社會的に自由な天地に立つて、もう誰にも頼らぬといふ心持を持つて欲しい。思想問題でも政府は何をしてゐるか、何故取締らぬかといろ／＼云ひますけれ共、それは間違つてゐると思ひます。俺達が惡思想を撲滅するから、政府はなるべくそつとして居ればよいといふやうな意氣が欲しいのであります。政府の權力に頼らないで、政府の規則に頼らないで、國民が自發的に國家のため日本のためやるのだといふ氣持を起して呉れなくてはならないと思ひます。それでなければ偉大な國民とは云へないのであります。如何せん、町村自治でも小學校教育でも我々も規則いぢめを町村に對してして

來ましたけれ共、さういふ組織になつて居つて、本當の思ひ／＼にやる餘地が財政上規則上、行政上凡ゆる方面に於いて少ないのであります。そこで我々の青年團では何んにも強制しない、規則がない。我々は全國を見て居ります。そして心配はして居る。指導はしますけれ共、命令はしない。規則は出さない。各自が自分の村の青年團を考へて見て、團旗を作らうと作るまいと、團服を作らうと作るまいと、その村の實情に應じ、その青年團の實情に應じ、團長はどうしようと、副團長はどうしようと一切勝手、修養部、體育部、産業部何んでも宜しい。一切關係しない。さうして各自に委せて實情に適した方法でやらす。さういふところに地方の青年の教育があるのであります。て、この自主創造に進むには郷土、村といふものを本當に考へて見なければならぬのであります。だから我々の青年團では郷土研究とか、郷土調査といふことが非常な重大な問題となつてゐるのであります。自分の村が今日のやうになつて來たのはどういふ譯か、どうして自分の部落が發達して來たかといふ事實を明かにし、そして

風俗習慣は出来るだけ保存する。又郷土の藝術、郷土の民謡、郷土の踊り、さういふものをどん／＼保存する。出来るだけ自分の郷土といふものを味つて保存して置く。又いろ／＼の農具でも何でも昔からいろ／＼に變つてゐるし、さういふいろ／＼の郷土資料を保存する陳列所といふものを作りつゝあるのであります。郷土を研究するといふところに本當の日本精神が出て來るのであります。唯日本精神々々々と口だけて云つて居るのでは、それは時の勢ひになるだけで、本當の日本精神はこの郷土藝術、即ち日本民族の生活、日本國民の生活そのものを深く掘り下げて、その尊い研究を見出し、そこに尊い歴史を見出す、そこに根ざさなくてはならぬと思ふのであります。

私が神職の方々に願ひするのは、その郷土を拓いたのは神社であります。神社を中心として郷土生活といふものが拓かれて來たのであります。そこで神社の手によつて神職各位の手によつて日本の郷土研究といふものが、本當に起らなくてはならない

と思ふのであります。それには神社に郷土資料陳列所があつて欲しい。青年團集會所があつて欲しい。さうして郷土を研究された、その郷土の中からこそ本當の純日本のものが現れて来るのであります。さういふことを切に我々は考へざるを得ないのであります。

昔は他郷に出て克苦精勵して立身出世して郷土に歸る、所謂故郷に錦を飾るといふことが男子の目的であつたが、青年團ではさういふものを目的とはしない。金を儲けて故郷に錦を着て歸るが郷土は亡びて來てゐるといふ状態にはしない。錦を着て歸るといふ青年精神のお互ひは、郷土そのものを錦にせずんば止まないものであります。郷土そのものを立派にして自分の村をよくする、そこに青年團の具體的の修養の目標があるのであります。さうして勿論國家であります、郷土を無視して國家は發達しませぬ。普通の人々は唯忠君愛國と云つてゐるが、本當の忠君愛國の實を擧げようとするれば、先づ自分の郷土をどうしても良くし、發達せしめなければならぬのであります。

す。風儀をよくし、衛生状態をよくするといふ風に本當の忠君愛國ならこゝまで來なくてはならないと思ふのであります。又戦争の時ばかりではない、平時にあつての忠君愛國はこの郷土をよくして行くことが即ち忠君愛國でなければならぬのであります。偉くならなければ忠君愛國は出來ないと思ふのは間違ひで、誰もが陸軍大將となる、大臣となることは出來ない。郷土を愛することが忠君愛國となるのであるといふこの日本的な考へ方が地方自治の精神であると思ふのであります。

六

て、尙青年團はかういふ根柢の上に立つていろ／＼修養或は事業を行つて居りました、殊に村の産業といふことには一段の力を効して居るのであります。かういふ機運になつて居りますから、どうぞ皆さんの手で建國以來の神社を中心とした地方生活、郷土生活といふものと密接不離の關係にあつて育つて來たこの青年團といふものを指導して戴きたいのであります。神社は唯國家としての祭祀の奉仕だけではない、昔か

ら地方生活の中心、郷土生活の中心、これが何んとしても日本の地方の神社の本質だと私は考へるのであります。そこで今日でも郷土の更生、地方生活の中心として神社が大いに御活動願ひたいのであります。その御活動の一端としてこの青年團のあることを申述べ、神職各位が青年團の御指導に努力せられんことを切望する次第であります。

(文責在編者)

昭和九年五月廿三日印刷
昭和九年五月廿六日發行

(定價金拾五錢)

東京市澁谷區若木町十一番地

編輯兼
發行人 財團 全國神職會

右代表者 太田 眞一

印刷人 正木 正家

東京市國島區高田南町一ノ三五七

發行所 全國神職會

東京市澁谷區若木町十一番地

